せたかむい
発行・古平町史編さん室
文化会館 ☎42-2590
第209号・平成19・2・1

年表で読む古平の歴史

[114]

商工業 ①

商業

古平の商業について知るとすれば、岡田家の漁場請負いの時代にさかのぼって概要を知ることがいいのではないかと考え、明治以前のことをまず述べることにする。

◆松前藩が支配

幕府から蝦夷地を治める権限を与えられた松前藩は、蝦夷地では米のとれないことから本州の大名のように「禄高」はなかったが、蝦夷地での特別な権利を認められていた。その一つがアイヌと交易（品物を交換して商売すること）する権利の独占で、これが松前藩の経済を支えていた。

藩では禄高（給与）の代わりとして主だった家臣たちに土地（場所）を貸し与え、そこで家臣がアイヌとの交易によって得た利益を禄高に替えていた。それが次第に商人の手に任せられるようになり、家臣（知行主）はその場所を貸した権利金を受け取るだけで、一切の運営はこの商人（場所請負人）が行なうようになった。このような制度を「場所請負制」といっている。

蝦夷地での大部分の場所の開かれたのは慶長年間（一六〇〇年前後＝北海道漁業史）といわれているので、古平もその頃、当時の「古平場所」として漁場が開かれたと考えられるが、初め誰が知行主であったかはわからない。

後に知行主が新井田喜内の頃から、近江八幡（滋賀県）に本拠をもつ岡田家が古平場所を請負うことになった。

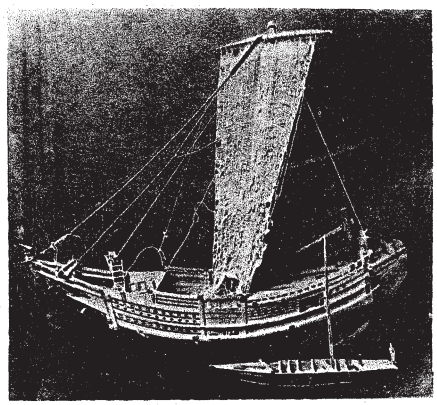
古平場所では交易だけではなく漁場が開かれたことにより、急速にその後の町の発展につながっていった。

◆「場所請負制」とは

古平での商業というか商売を考えるときに、その始りはこの場所請負制にさかのぼる。お互いが品物を交換する物々交換は、商売の始りである。もう昔になったが、戦時中は「お金」も通用したが、物々交換が生活に大きくかかわっていた時代であった。

場所を貸し与えられた知行主は年一度に限って、夏の凪の頃を見計らってアイヌの入用な品物を船に積み込み、古平場所に来てアイヌの産物と物々交換（交易）をし、それを松前に運んで商人に売渡し、その利益が自分の給与であった。

しかし、このようなやり方は、経済観念にうとい武士にとっては慣れないことであり、何とも煩雑であった。そこで商売が本業であり慣れている商人に任せ、その権利金を受け取ることで安定した収入を得られる方法として、場所請負制が適当とされた。



←最初の頃の北前船は莚（ムシロ）帆を張っていた（岡田家所有）

藩主・知行主がアイヌとの交易をする場所が運上屋（家）であり、請負人にとって経営の拠点となった建物である。

初めの頃は粗末な建物であったが、

アイヌを相手に交易するだけではなく、請負人が漁場を経営するようになると、次第にそこに働く人達を管理、支配するような場所に変わっていった。

岡田家が場所請負人として活躍し始めたのは一七五〇年頃で、古平・岩内場所を請負った五代目弥三右衛門からである。

岡田家はもともと松前に支店を置き、呉服・反物・日用雑貨・魚網などを回漕して、これらの販売を本業としていたが、古平場所を請け負ってからは米・塩・酒・その他生活必需品を場所に送り、アイヌとの交易をしながら、漁場に働く和人を相手に店も開いていたと考えられる。

神威岬は西蝦夷地の三険岬（海の難所）の一つとして恐れられていたが、松前藩は元禄四年（一六九一）から神威岬以北への婦女子の通行を禁止し、安政二年（一八五五）、一六〇年余り経ってからようやく通行禁止が解除された。これは今から僅か一五〇年ほど前のことである。そのことによって、積丹から石狩一帯にかけて永住する人達も増えてきたが、一般の人達が商売することは許されず、岡田家だけが請負人として商売を続けていたようである。

◆岡田家の経営

道内では八五か所近くの請負人がいたが、興亡のはげしい場所請負人として一〇〇年余り、一三代にもわたって同じ土地で一族が請負人をしていたというところは、古平場所での岡田家以外にはないようである。理由はよく分らないが、最後まで請負人を続けていた古平・小樽（オタルナイ）などでの経営が順調だったこと、小樽ではケチくさいと酷評されながら、堅実な経営によって家業を支えてきたことなどが挙げられよう。

しかし、道南でのイワシ漁の不振などから借財が滞り、慶応二年（一八六六）、好調だった古平場所を種田徳之烝らに譲渡することになり、一世紀以上も古平場所に君臨した岡田家もついに古平から撤退した。

その時の引継ぎ文書によると、当時の古平の状況は次ぎのようであった。

一、ヨイチへ　二里二〇町　※
一、箱根より　陸路　一一四里程
　　海路　九三里程
一、人別　一三三一人
一、運上屋　一軒
一、番屋　五軒
一、漁船　六二艘
一、差荷物料　金九両二分
一、烽火台　一ケ所
一、船掛り場　一ケ所
一、鮭　一万五千石目

※一里＝三六町＝約四キロメートル

←フルヒラ場所を譲渡した後の「御運上金取調書」より

フルヒラ御場所
請負人
半兵衛代
徳之烝
一、金弐百六拾両　御運上金
一、金百弐拾両　秋味御運上金
一、金参千弐百五拾六両二分
　　寅年増御運上金

慶応二年（一八六六）運上屋が岡田家（岡田八十治）から種田徳之烝に移ったが、種田家もまた引き続いて出稼ぎ漁民らに生活必需品の販売をしていたようである。

諸品代書上
（品名　省略）
明治三年八月　古平場所
元請負人種田屋徳之烝
代　喜三郎

古平御開拓使
御出張所

以上のように、開拓使に納品をしていて、開拓使出張所の依頼により、物品購入の手続きをしていたのではないかと考えられる。

◆明治時代の商業

道南や東北方面から追鰊（おいにしん）や出稼ぎで古平（来た人達は、鰊漁が盛んになるにつれて次第に住みつく人も多くなり、物品の販売を職業とする人達が現れるようになった。最初は弁財船（古平では弁財船＝べんざい・べざいと呼んでいた）からの荷物を委託販売する程度で、呉服・反物・小間物などはもっぱら行商であった。

〈この稿　次号に続く〉

高野名幸作さんの日記から
当時の世相を見る
〈121〉

大正十四年 ～続き

▼九月二八日

起床六時半、朝のうちは珍しい快晴、妻はソイさんらと今日もキノコ採りに行く。今はキノコのおいしい時期だ。九時頃から一天にわかに曇り雨が降り出した。一〇時頃役場へ行き、国勢調査の番地不明の分を調べ、一一時半帰る。禅源寺で明晩、在米二〇年という中西秀三氏の講演会があるとのことで、私に演題書きを依頼される。「日米問題を論じて普選と本道拓殖問題に及ぶ」を書く。明晩は盛会ならん。五時頃、大雨をおかして国勢調査申告書の代書をする。鎌田、高口、その他六軒を書き集めた。七時半帰り夕食、夜になっても雨は止まぬ。

▼九月二九日

起床六時、朝から好天気、毎日毎日の雨で畑作も収穫に困っているので、どこでもイモ掘りやアズキ落しなどで忙しい。私は九時頃、国勢調査で出かける。申告書の代書記入を一五、六軒やるが、なかなかの手数だ。一二時、富本で一段落し、のち農園を回って14号を食べてみる。一時家に帰る。勇丸が小樽へ行くので岡崎、十へ旭リンゴ一籠あて送り、幸治へもリンゴや衣類を送る。午後七時から禅源寺で、中西秀三氏の講演があり行く。いろいろと有益な講演であった。一〇時終る。

▼九月三〇日

起床六時、天気快晴、イカは七〇から八〇あてとれた。国勢調査も近づき、いよいよ明日となったので、私は七時から出かける。ナカナカ手数なものだ。二〇軒ほど申告書を集めて正午に帰り、昼食後、竪月さんの葬式送りに行き二時帰る。三時過ぎトミ、四郎を連れて農園行き。熊さん、天野さん、ソイさんに出面一人を入れてイモ掘りをやっている。珍しい天気で忙しいことだ。スイカ、リンゴなどを食べ、五時からまた国勢調査に歩く。八時に帰り夜食、妻らは枝マメもぎをやっている。

▼一〇月一日

今日は祝聖会の例会日、そして国勢調査の日だ。四時一五分起床、洗面後早々に出かける。町中はまだ薄暗い、禅源寺へ着いたらちょうど読経の始まるところ。第一番であった。暑からず寒からず心地よい時期だ。和尚の部屋で休みいろいろ話す。帰ったのは六時半、朝食をすませ、七時から申告書集めに出かける。一二時までに残り一二、三軒と努力した。畑などへ出て留守が多いので夜行くことにした。明日は十五夜なので、畑からカメナシ、リンゴ、スイカ、カヤなどをとり近所へも配る。今日は一日中珍しい天気だ。熊さんは天野さんと58号の樹の寝たのを起こしている。夜六時から申告書集めに歩き、八時、全戸八七戸分を集めた。これで安心した。明日、整理して役場へ届けるつもりだ。

▼一〇月二日

昨夜九時頃から雨が降りだし、時々電光、雷鳴がある、今暁になって晴れた。五時半に起床、今日は旧八月十五日だ。畑方面から青物売りが来ること来ること。車に積んだり担いだりして、何十人も来る。これが全部売れるのだ。熊さんは農園で枯れた木を切り始末している。家でも二時頃、二階に月見の馳走を供える。ヤマセ風が強く、大時化で寒い。お月さんは見えぬ。これが良夜であったらどんなにか良かったろう。国勢調査整理も終り、役場へ届けた。

▼一〇月三日

起床五時半、昨日来の雨風、今日になっても収まらぬ。夜来、板戸を打つなどガタガタして休まれぬほどだ。今朝も荒れる。六時頃浜へ出て見る。沖風が激しく大時化、沖は山のような白波が立っている。一日中大風が吹き少しも止まぬ。戸外は吹き飛ばされそうだ。この風の中、積丹来岸から三名が刺網を買いに来て一、七〇〇間売る。大勉強する。平田から今日手紙で「九八」と来た。これだと一〇円三

○銭くらいに売らねばならぬ。

▼一〇月四日

昨夜早く休んだので、今日は五時に起きた。洗面後、浜辺を散歩する。旭日が高島の岬から昇るところ、赤くキラキラ輝き何とも言われぬ気持ちだ。風も昨日よりはよほど収まり、波もだんだん静かになった。浜には寄り木を拾う人が四、五人出ている。昨日の風でリンゴが三五〇斤ほども落ちたそうだ。九時頃からようやく青空が見えた。昼食後、久し振りで農園行き、熊さんと落ちリンゴを拾う。日曜日なので子供達の大一行が来て、いろいろなもので鍋料理に一生懸命だ。天気も良く暖かいので、悦三、四郎などは上半身裸で、マラソンだと言って畑の中を走っている。ご馳走を食べた後、遊んだりして四時頃帰った。私は熊さんとフジ、アヤメなどを植え替えする。

▼一〇月五日

起床五時、まだ暗かった。この頃は寒くなった。袷と襦袢(じゅばん)、シャツでちょうどよい。学校前から禅源寺墓地の方まで散歩する。帰ったのは六時半。今朝、本大阪のおじさんが出発するというので八時に見送りする。上ナギでよかった。イカ漁は五〇～一二〇ぐらいとれる。午後から農園行き、熊さんはリンゴの樹のバイ切りをやっている。本支店の落葉松、この度売買できたというので、人夫が大勢で切り出しをやっている。夜、大鶴間に遊びに行き、いろいろ話して帰る。

▼一〇月六日

起床五時、天高く馬肥ゆる好季節、洗面早々に浜へ出て見る。学校前から梅野畑の奥まで散歩する。桐、杉、落葉松などがずいぶん大きく生長している。朝の空気を吸って樹間を散歩するのは気持ち良い。六時に半鐘が鳴る、今日は消防演習の日だ。沖村大謀から大アバ縄一六丸注文あり、馬車で届ける。消防演習は本陣の川から蒸気ポンプで水を揚げている。イカ漁は二〇〇あてぐらいとれた。平の仕入れたイカの荷造りをする。

▼一〇月七日

起床五時、この頃の気候は気持ち良く、毎日早起きだ。今朝は寒暖計五二度F(一〇度C)にまで下がる。子供らタビがほしいという。洗面早々海辺を散歩する。大謀の起し船が発動機船に引かれて起こしに出て行く。後、三山神社境内の坂を上がり四方を眺め、農園に寄って帰ったのは八時だ。午後三時の富丸で元帝電の高橋さんが来られる。夜六時から堀ビヤホールで夕食会を催す。祝聖会員のほか三名が出席する。大いに飲み騒ぐ。鮭鍋がおいしい。一〇時過ぎ帰ったが大分酔った。今日午後二時頃、本支店の松林の木を切っていた人夫の一人が、誤って材木に打たれ死亡したとのこと。実に気の毒なことだ。

▼一〇月八日

昨夜、ビヤホールで高橋さんの歓迎会ずいぶん賑やかであった。今朝五時、観音滝参拝を約束していたので四時半起床、まだ真っ暗だ。洗面早々支度をして自転車で走る。高橋さん、和尚、本主人らは客馬車だ。私は十の畑辺りで客馬車に追いつく。寒いこと寒中のようだ、霜がおりている。泥の木で自転車を置き、滝に着いたのは六時半ちょうどであった。一時間ほどで着いた。二〇分ほど経ってから一行がみな集まる。灯明、供物をかざり、観音経をあげる。思いがけなく工藤さんから新米の炊き立てが出され、ナス、キウリの漬物をおかずにして、実においしかった。七時半に帰路につく。周囲は三分ほどが紅葉している。午後一時、高橋さんが帰られるので見送りする。

▼一〇月九日

起床六時、例によって海辺を散歩する。学校周辺まで歩き七時帰る。イカ漁二〇ぐらいから五、六〇〇もとった船が二隻あるとか、不同のあるイカ漁だ。聞けば今暁、余市黒川町で大火があり、一〇〇余戸が焼失したとのこと。火事は恐ろしい。これから寒さに向かって気の毒なことだ。熊さんは農園行き。今日はリンゴ苗木を本植えしたとのことだ。禅源寺の和尚さんから依頼の一七日観音滝参拝のビラ五枚を書く。

▼一〇月一〇日

起床六時、ポカポカ暖かい日で、海辺を散歩する。フグ釣りに二、三人集まっている。子供らも四、五人でタコ揚げをやっている。よい天気なので、皆畑仕事や秋始末に忙しい。イカ漁も不同あり思わしくない。午後三時頃農園行き、熊さんはバイ切りをやっている。支店では落葉松伐採を大勢の人夫でやっ

ている。

▼一〇月一一日

起床六時半、昨夜珍しく暖かいと思っていたら、夜中から雨になり今暁まで降る。風も強く海も大時化になった。寒風が吹きアラレでも降りそうだ。熊さんは午後から農園行き。新聞によれば新潟の新津でも大火があり三〇〇余戸が焼失、石油タンクにも延焼して石油が五千石も燃えたとのこと。火事は実に恐ろしい。裏の イ石河で建前があり、父が祝いモチを拾ったといって喜んで来る。夜に入っても寒風が吹き海は時化だ。

▼一〇月一二日

起床六時、海辺を散歩す。寒くなった。丸山も三分通り紅葉を呈した。積丹岳はまだ雪が降らぬ。雪も近々だろう。熊さんは農園行き、今年はリンゴが不作なので割りとヒマだ。古平潅漑溝工事、五、六年前から倶知安の請負人がきて工事に取りかかった由。明年は水田が沢山出来ることだろう。小林老婆、一昨日から針仕事に来ているらしいが、七八歳というのに、まだ眼鏡もかけずに針に糸を通し仕事をしている。実に珍しい丈夫な方だ。四郎のワンパクぶりには悦三も負けるようだ。どこも体が悪くないからこの元気なのだ。

▼一〇月一三日

起床五時半、例によって海岸を散歩する。大謀もこの頃は思わしい漁もないらしい。天気快晴、熊さんは農園、私は店番だ。妻は午後から支店の畑と 十 の畑へユリ、キクなどの苗を貰いに行く。夜、大 に遊びに行き、いろいろ話し一一時帰る。

▼一〇月一四日

起床六時、朝夕はずいぶん寒くなった。熊さんは農園へ行き、阿部7号をもぐ。私は店番。沖村大謀で昨日、大マグロ一〇余本とったとのこと。本年は割合値段が安いので金額につながらない。三時頃農園へ行く。ネギの土寄せをして夕方帰る。夜、本 へ遊びに行き一〇時半帰る。

▼一〇月一五日

今日は祝聖会の例会日、四時一五分起床、四時半出かける。まだ薄暗く、竹浪君、西村君が来ていて三番目だった。四時五〇分から読経が始まり六時前終る。和尚の部屋で例により時事について談笑す。七時帰る。夜、中 で佐渡人会の謡いがあるとて聞きに行く。

▼一〇月一六日

起床六時、天気快晴、秋色ますます深く、心気壮快で食べ物もおいしい。近頃にない好天気、役場で国勢調査統計票の整理につき、手伝いを依頼され八時に行く。九時から一五、六人で一生懸命やる。昼食は鍋焼きが二つあて出た。三時半ようやく終る。帰ると大謀から大網のことで話しがあるというので自転車で行く。帰途 ヨに寄り、鮭鍋で夜食を馳走され七時帰る。星は満天に輝き、明日の観音滝参拝は上天気らしい。

▼一〇月一七日

起床七時、今日は観音滝参拝日。昨年は雨や雪の最悪の天気であたが、今日は珍しい快晴、天高く馬肥ゆるとは今日のような天気だ。こんな上天気になるとは思いもよらなかった、実に幸運だ。八時頃から中央通りは参拝の人が続く。一〇時に着く。泥の木では潅漑溝工事にかかっている。泥の木から観音滝までの沿道は、半分以上も紅葉していて実によい眺めだ。一一時から読経が始まり、のち宝探しなどの余興もあり、二〇余点を賞品に出した。一時頃から昼食、あちこちで台鍋などの馳走があり、メートルを上げて大騒ぎ。私は二時に山から下りてハイカラ山で休み、家に帰ったのは四時であった。

▼一〇月一八日

起床七時、昨日の疲れで遅くまで休む。今日は在郷軍人分会の射撃会、泥の木ススキナイで行うというので軍人連がずいぶん通る。勇丸が小樽へ行くというので、岡崎へ大根などを送るべく、熊さんや妻らと農園へ行き、荷車で浜まで運搬する。合計三五〇本送る。妻は寺参りで昼前に帰り、私らは板倉で昼食をする。午後になり時々雨が降ったが、ケラを着て大根を洗ったり編んだりして夕方終る。

▼一〇月一九日

起床六時、洗面早々海岸を散歩する。太陽は今ローソク岩の方から昇るところだが、これだけ日が短くなったのだ。丸山も七分どおり紅葉した。帰って朝食後床屋へ行く。組合の竹内さんから買い入れた家の件について、何とか話しをまとめてもらいたいと頼まれる。二五〇円までなら買いたいが、二七

〇円で買ってくれと言っているとのこと。正主人の一周忌に招待され出かける。客は二〇数人、正隆寺の新しい住職が来られる、初めて面会した。一一時から読経が始まり一二時に終わる。その後、配膳し馳走を受けて二時帰る。四時から墓参に行く。小雨がポツポツ降り出し暗い秋の日だ。昨年だと今頃はもう寒かったが、今年はよほど暖かい。夜、妻らは大根の切り漬などの支度をする。九時頃から音をたてて秋雨が降る。

一六日、国勢調査の結果

世帯数　一、四二六世帯

人　口　七、三二五人

男三、五三七人・女三、七八八人

大正九年より五五〇人減少

▼一〇月二〇日

起床七時、昨夜は暖かかったが、今朝になり大雨が降り出し寒くなった。道路は悪く、子供らは学校へ行くにもこの悪路では困る。家に残った四郎ら三人は戸外にも出られず、家の中で騒いでいる。子供がいれば賑やかだ。水難救済会では今日演習があるそうだが、この雨では大変だろう。例の家の件、二六〇円なら買うというので、相談のうえ返事することにした。雨はなかなか止まぬ。

▼一〇月二一日

元野沢さんの家の件、信用組合と交渉が成立、二六五円で売買契約ができた。終日雨が降り悪い天気だ。

▼一〇月二二日

毎日の雨と風だ。今日は寒さがきびしく、アラレが降り出し急に冬になったようだ。九時から役場で、学校地水田について協議があり父が行く。父もこの頃は気分がよろしいようで元気だ。午後一時から役場で国勢調査員の慰労会があり、役場前で記念写真を写した。吉井で昼食、酒肴が出る。今日から奥座敷にコタツをかけた。

▼一〇月二三日

毎日毎日の雨も今日はようやく晴れた。大根抜きもこの雨で遅れたので、家ごとに大根の始末に忙しい。イ石河主人、かねて不快にて小樽や札幌の病院へ診察に行っていたが、今朝、札幌の病院へ入院すべく行ったところ、廊下で突然心臓マヒを起して亡くなった由、実に意外なことであった。奥さんも病気でスッキリせず、子供はまだ幼少、実に気の毒なことだ。

▼一〇月二四日

今日も幸い好天気、秋始末の大根抜き、大根洗いなどでどこの家も忙しい。私の家でも熊さん49号もぎ、妻やコノさん、ソイさんらはタイ菜洗いだ。今夜、イ石河さんの遺骨が船で余市から来るというので、私も出迎えに行く。一〇時頃着いたが実に気の毒なことだ。読経があり一一時帰る。

▼一〇月二五日

天気快晴だが実に寒い、火鉢がほしい。コタツに入りたい候となった。妻はイ石河さん（弔いに行き、八おっかさんと針仕事の手伝いだ。熊さんは農園のリンゴもぎだ。私は五時から石河さんの通夜に行く。大勢の人がお参りに来ている。

▼一〇月二六日

起床七時、朝夕は寒く朝は四七度F（八度C）に下がる。妻は石河さん（手伝いに行き葬式送り、私も送りに行く。天気もよく送り人も多い。供花も一〇余り、弔辞も一〇通余り、近来にない盛儀であった。夜、忌中引きに招待される。

▼一〇月二七日

一〇月の末には珍しい暖かいよい天気だ。大根や秋始末にはまたとない日和だ。妻は出産も間近になったと、小林老母といろいろと針仕事や布団の支度などしている。来月早々にも出産するだろう。どこも悪くなく壮健なのは何より幸運だ。熊さんは農園行き。平と才太郎さんは、支店から買い入れた松の丸太で納屋造りをする。この天気で幸いだ。三浦直さんでは亡父二三回忌、亡母七回忌の仏事があり招待されて行く。この頃は父の代わりに出ることが多い。二時頃帰る。海は上ナギ、秋の海は殊に景色がよい。三時墓参す。月末なので目録書きをする。夜、亡母の命日なので久し振りに観音経をあげる。

▼一〇月二八日

起床七時、今日もまた暖かい。母の命日なので和尚さんが来られる。倉庫で49号リンゴ選びをする。一〇時半から火防組合の楓風会が支店の農園である。鮭鍋で大いにやる。暑いほどの好天気となり、周りの紅葉を眺めつつ愉快に呑む。一時半散会、四、五人で本の山、イ公園を散歩し、帰りしは五時、よい運動であった。

〈続く〉

古平と私

八、三位一体の力

葛西庸三

息子が五年生になるとき、古平小学校へ転校した。それまで児童数が三十人足らずの小さな学校にいたので、野球をしたくても仲間がいなかった。

複式学校間の体育関係の交流は、年二回のソフトボール大会のみであった。

野球をしたくてウズウズしていた息子は、古小転入と同時に野球部に入った。

それまでキャッチボールも満足にしていない息子は、当然タマ拾いの生活であったが、嫌な顔ひとつしないで毎日夜遅くまで仲間と一緒に白球を追い続けた。

監督は滝沢繁先生で皆藤竜男・高橋勝美先生も指導に当り、応援団はたくさんいた。

皆、現役の野球選手であり、指導理論に長け、子ども達の心の掌握も抜群であった。

時々グランドに顔を出して練習を見ていた私は、なるほど、野球の指導ってこういうふうにやるものか、と心の中で感心し唸った。

いろいろな大会が近づくと練習も激しくなる。日の長い夏でも白球が見えなくなるまで練習は続く。先生達は仲が良く、指導者が疲れて職員室に戻ってきた時には、冷たいビールが机に用意されていた。

試合の時は、いつも吉野浩次さんの奥さんが会社の車で送迎をしてくれた。本当に頭の下がる思いのする、有難いことであった。

息子が六年生になり、グランドで練習が始まったある日の夕方遅く、息せき切って帰ってきた。らんらんたる眼をしていた。

――お父さん、ぼく、レギュラーになったよ。センターだよ。

大声であった。よほど嬉しかったのだろう。

当時、野球部は四十人近くいたのだから、試合に出られるレギュラーに選ばれることは、大変名誉なことであった。私も妻もすっかり嬉しくなり、その夜は三人で乾杯した。

いよいよ昭和五十四年度の後志少年野球大会が倶知安で始まった。その時は普通授業をしていたので、多分七月中旬ではなかったのか。

大会前日、私達は滝沢監督を囲みささやかな出陣の宴を開いた。

――今年はピッチャーがいい。スピードがあってコントロールもいい。全体に打撃もいいし、相当にいいところまでいける。

滝沢監督は自身を持って言い切った。それまで古平野球少年団は、大会の時になかなか勝ち進めないでいた。

いよいよ大会が始まった。滝沢監督の言葉どおり、わが古平野球少年団は、一回戦を勝ち抜き、二回戦も勝ち抜き、準々決勝も勝った。

凄い勢いであった。その三試合の中で、息子はランニングホームランを三本打った。私は飛びあがらんばかり嬉しく、その都度、球場の横にある公衆電話から学校に報告した。

二日目、準決勝があった。相手は岩内だ。

古平は後攻め。最終回、ランナー二塁、一打逆転サヨナラの打席は息子であった。なんとか打ってくれ、神に祈る思いであったが三振にたおれ、残念ながら三位で終わった。

優勝したらパレードだ、と勢い込んでいたのだが、しかし、練習の成果を十分に発揮できて、みな満足であった。

その後古平野球少年団は、後志や全道で大活躍する黄金時代を迎えるのだが、この年がその端緒であったと思う。

私はその後、余市黒川小、島牧小中、寿都小、そして再度黒川小に勤務することになるのだが、どの地でも思うことは、やはり指導者の力倆である。そして子ども達の努力であり、それを支える保護者と地域の協力である。

この三位一体の力がチームを強くする最も基本的なことであることは、今も昔も変わらないと思う。

亥年の真夜

大澤文子

ああ・・わたしはこの一年・・海の幸のさまざまな思い出を胸に直ぐ駆け抜けて行こうと、新年の真夜ペンをとった。

思えばわが家の次男がいまだ幼なかった数十年前のことではあるが『たま風』の吹く頃になると毎日のように、若い衆が畚（もっこ）を背負い、大きなクロ鰈を持って来てくれたものだった。獲りたての大きな見事な鰈だった。

「ありがとうネ！　ご苦労さん！」言う間もなく若い衆は「あいよ！」とたくましい笑顔を残し駆けぬけていってしまうのが常だった。

『たま風』・・とは、北の日本海沿岸は北西からの季節風がまともに当たるので、この方向からの風を漁師の方々は『たま風』と呼んでいるのだよ・・とある日教えられた。「玉」と言うことは「宝」を意味しているんだよ・・とも聞かされた。

「なる程なァ・・」それぞれの道にはそれぞれの深い意味があるのだなァ・・と再度感心したあの頃だった。

昭和二十五、六年頃までは、大澤家の海側の方にはまだ、だだっ広い土間があった。その片隅には四角く区切った大きな炉があり、浜の白い小砂利が敷きつめられてあった。姑（はは）はその炉に木炭を山のように積みあげ真っ赤に火を熾こすのだった。若い衆の持って来てくれた大きな鰈を、平たい竹串にすばやく編みこむようにさしてゆく、姑の手さばきは見事だった。真っ赤に熾きた炭火をめぐり、プチプチとかるい音をたててクロ鰈はほどよく焼けてゆく。

「ホーラかれっこ焼けるヨー、とっくりかえして焼けるヨー」ふしをつけて歌うような姑の声が土間を通し、ふすま越しにきこえ楽しそうだった。竹串で焼いた身の厚い鰈はホカホカでおいしい。ホッペタが落ちそうという形容詞があるが、そのものであろう。今でもその味は忘れられない。朝明け早々、「おーいねえさん！　もってきたよー」の大声にあわてて身支度をして戸を開ける・・・・日焼けした若者の笑顔が、手かごに山盛りの海雲（もずく）を無造作にさしだす。

「わあすごい！　ありがとうネ」山盛りの海雲は黄金色に艶めき、したたる海水は冷たくわが手を濡らす。

「ありがとうね、うれしい！ヨー」

礼を言う私の言葉もそこここに早、若者の姿も影もない。

春らしい太陽が雲間からのぞく頃になると町の主婦連は落ち着かない。潮が引き遠浅になった岩場には三々五々、寒海苔を採る主婦連の姿は絶え間なく見え、何かしらうれしくなることもある。海の好きなわが家の姑も鮑の貝殻を何個も手かご入れ、いそいそと出かけてゆく後ろ姿を今でも思い出すと楽しくなり、その頃のアルバムを眺めることもある。

大寒もすぎ春待つ季節になると、豊漁だった助宗が各家庭の軒先に吊され、カランコロンと音をたてて干されてゆくのが珍しく眺めていたひとときもあった。漁網をかけてあるのは烏からの被害を防ぐためとあとから聞いた。

浜風が吹くと、綿糸に吊られた干魚がどこの軒先からも「カランコロン」と鳴り、何かムード的な音楽のメロディーにきこえ、耳をかすこともたびたびのことであったなァと懐かしく思うこともある。

また海沿いの道のそこここに細い棒を渡した干し場があり、採りたての若芽がかけられてあった。浜風に揺れる若芽はフーッとこころよい磯の香を放つ。

「あーいいなァ・・」

採りたての若芽は即、味噌汁の実に・・、酢のものに・・、そして家族の朝餉の膳に・・載せる、海の町に住む特権であろう！

「海は生きている！」

「生きる糧（かて）をあたえてくれるのだもの！」

「この新鮮なそして限りない思い出を胸に亥年の真夜、わたしは書き続けている」

思い出す母の言葉

池田テル

鰊の群来た頃の古平の海と浜、人とニシンがいっぱいの、活気あふれた当時のニシン場は私の胸の中からはなれることはありません。そして景気がよかった。しかし、大漁が続いてこの町の景気の良かったのは、明治から大正五年生まれの私の幼い頃までだったと聞いています。

私の小学校入学の時、母は通学に必要なものを買い、私の新しい着物も届いた。その頃には、もうニシン漁はかなり薄くなっていたようでした。

町角にある大きな店に母と買い物に行くと、店先でよく見かけた水筒が、まだ売れないで二個下がっている。欲しいと前から思っていたのでそっと触ってみる。

いつも笑顔の店のおばさんが、「この頃はさっぱりお客さんが来なくて……。」と、そんなことを話していたようでした。

その日の夕方のこと、父が私の長靴を買って来てくれました。嬉しさのあまり思わず母に、「水筒も……」とつい言ってしまった。するとそばにいた兄に、「ぜいたく言うな、ニシンがとれなくて大変なんだぞ」と言われました。

私の家では、毎年ニシン漁期になると刺網をしていて、小学校卒業間近かな兄はよく父に手伝っていたし、母も暇なく忙しく働いていたのです。

冬になると暖かい炬燵（こたつ）で、母と語り合う日が多くなりました。ある日のことです。母に「秋の遠足の時、水筒を持って行った人いたかい？」と聞かれたので、私は、「うん、一人か二人……」「級の人は何人いるの？」「―五〇人かな…」母は少し考えていたようで、「きっと、みんな欲しくても我慢してるんだよ。そうだ、それではネ、級の半分の人が持ったら、その時はすぐ買ってやるからネ」

さして必要でないものは我慢させようという、母の気持ちも何となくわかったようで、私もかえってさっぱりした気分でした。

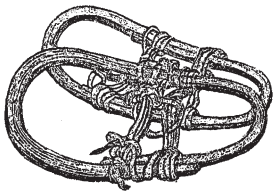
のち、家庭を持った私に母の言葉は生きていました。子どもらも欲しいはずのものも我慢し、父の亡きあとも前向きによくがんばってくれました。

今もわが子を思うとき、貧しくとも、遠い日の母の言葉が明るく懐かしく浮かんできます。

高橋健一さんから かんじき 寄贈

今では実物を見ても、何に使うものなのか、名前？を知る人も少なくなってきましたが、かんじきは雪国に住む人達にとっては、雪の上を歩くときや道つけをするなど日常生活や、山仕事のための必需品でした。

古平ではかいじきとも言っていました。かんじきはねばりの強いクワの木が使われますが、その土地によって形や造り方が違っていて、一本の木で円形にしたもの、二本組み合わせたもの、すだれのように編んだものなどほかにもありますが、北海道では二本組み合わせた（図のような形）ものが使われていました。



氷の上を歩いたり、登山用具として使われているものもありますが、こちらの方は鉄製で爪がついています。

日本では泥田のぬかるところでは、木製の板状のものが使われていて、田下駄（たげた）と呼ばれています。

ご寄贈ありがとうございます。

町内の学校探訪 2

明和小学校

◇鴨居木分教場となる

創立した時は四学年以下の児童(三六名)が在学していたが、大正四年度からは五・六学年の児童も収容するようになり、全校児童数は六一名となった。

大正九年九月、開所十周年記念式と祝賀会が行なわれ、記念として謄写版一式が贈られた。開所して一三年目の大正一二年四月、鴨居木特別教授所を古平尋常高等小学校鴨居木分教場と改称した。

年度ごとに児童数の増減はあったが、その頃には就学児童も五六名を数えるようになり、教室の増築は以前からの問題となっていた。そこで部落民は鈴木伊八の所有する土地五一六平方㍍(一五六坪)メートルを四〇円で買収し、土地を寄付して早急な増築を町に要請した。

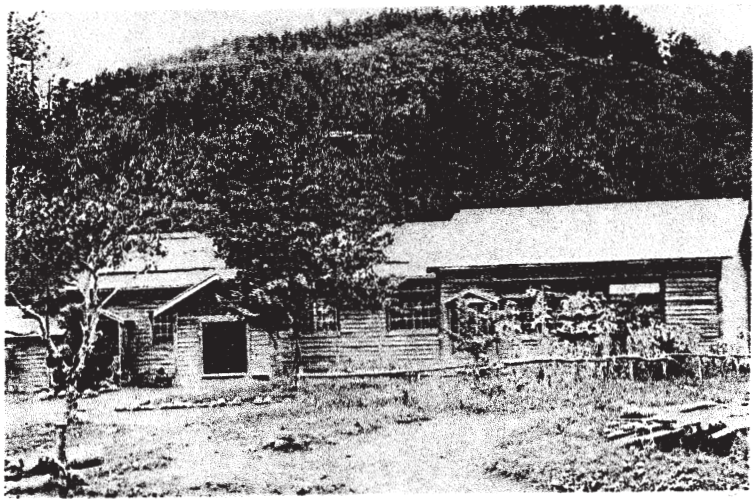
そして同年七月、一教室分六六平方㍍(約二〇坪)を工費四五〇円で増築落成したが、これは本校の古校舎の一教室を解体して移築したものであった。

増築には部落民延べ二六〇余人が労力奉仕をし、校舎に付属する職員住宅六・六平方㍍(約二坪)の増築分も部落民の寄付によるものであった。

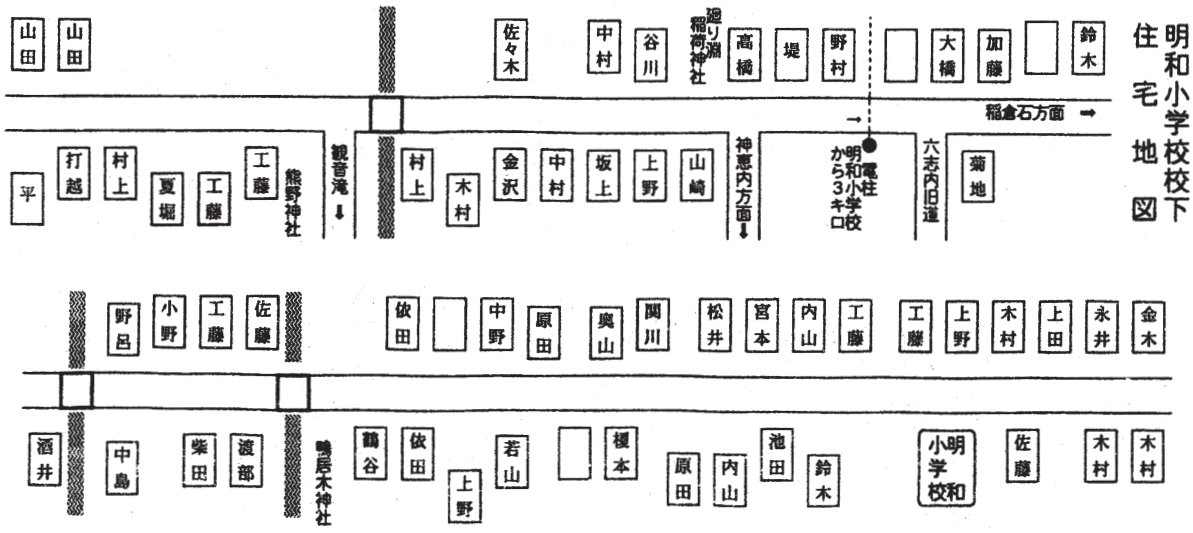
増築を記念し、高野常吉外六人から教室用の掛け時計一個が寄贈された。

大正一三年七月三日の日中、隣接する農家から出火、校舎の屋根に飛び火して一時危険な状況であったが、部落民が駆けつけ消火に務めことなきを得た。

大正一五年、屋根が葺き替えされ、それまで



↑　鴨居木分教場校舎（校舎増築前）



の柾葺き（まさぶき）屋根が亜鉛メッキ鉄板葺きの屋根となり、当時はまだ鉄板葺きが少なかったので校舎の体裁も少しはこれで整った。

児童数も次第に増え、その年は男子三四人・女子二九人、計六三人となり、以降昭和三五年中頃まで六〇人台を維持した。

開校以来、約二〇年勤続していた落合雄之烝訓導は昭和三年六月退職した。創立時から部落と一体となり学校教育を推進し、部落の指導的立場にもあった。泥の木部落会長、泥の木青年団長なども辞任し、七月退町した。

後任に荒川和訓導が赴任し、奥さんが女子に裁縫などを指導した。

◇開校二十周年・三十周年記念

昭和四年、開校二十周年記念式が行なわれた。この地区では水田の開発が盛んになり、兼業農家が多かったが戸数も増え、児童数も増え続けて六三名となった。

大正一五年の青年学校令により、本校である古平尋常高等小学校には早くから青年学校が設置されていたが、鴨居木分教場地区からの通学が困難であったことから、昭和六年九月、古平青年訓練所鴨居木分所として設置され、次のように指導員が任命された。

学科　荒川　和

教練　石下二郎　内山作太郎

この年は冷害による全道的な大凶作となり、古平でも水稲は収穫皆無という農家も出るという状況であった。保護者会では後期分の学用品などを購入し、全児童七〇人に配付するなどして援助した。

昭和一一年、荒川和訓導は美国小学校婦美分教場へ転勤になり、後任として石沢一郎訓導が赴任して来た。

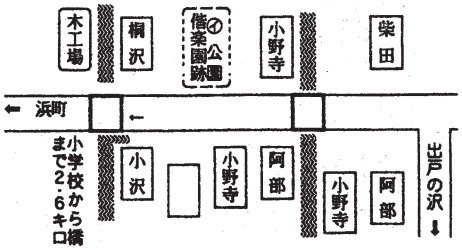
↑　開校30周年記念撮影・全校児童と教職員、関係者が祝う

折から陸軍特別大演習があり天皇行幸記念事業として、校下の三部落民が総出動し校庭の地盛りなどの労力奉仕をし、泥の木青年団では国旗掲揚塔を建設した。

昭和一五年、鴨居木分教場開校三十周年記念式と祝賀会が、部落民の協力のもとに行なわれ、藤田善平古平町長・中川東古平警察署長・旧職員落合雄之烝、外町会議員・学校関係者らが招待された。

なお日を改めて、記念行事として運動会も行なわれた。

―この稿 続く―



明和小学校校下の地図

この住宅地図は昭和32年、明和小学校の5・6年生児童が、社会科学習の資料として作成したものを描き直したものです。当時の地域の様子を知る上で大変役立っております。

水戸藩船 快風丸 千五百石

石狩に渡航してアイヌと交易

福山公園（松前町）に鳳凰松（ほうおうのまつ）という銘木があった。大正末になって惜しいことに枯れてしまったが、実はこの松は水戸黄門の名で有名な水戸藩二代藩主徳川光圀から、松前藩主の松前矩広へ盆栽として贈られたものである。その後、矩広から家老の下国家へ下され、明治の廃藩後、松前城址が公園となったときそこに移植したものであった。

このことから水戸家と松前家と親交があったかというとそうでもなかった。

光圀は、蝦夷地という名前さえ知る人の少なかった当時、北地の開拓を積極的に進めようとする先覚者でもあった。

天和・貞享の頃（一六八一～一六八七）、船頭であった崎山市内を武士として取り立て、二十五人扶持という格別の待遇を与えた。そして南部の地で南部・津軽藩の協力を得て、長さ二七間（約四九㍍）、幅九間（約一六㍍）、櫓四〇挺、帆柱一八間（約三二㍍）、五百反帆※の大船を建造費七千両、一〇年がかりで建造させ快風丸と名付けた。

この船には大小二艘の伝馬船（大は長さ約一七㍍・八丁櫓、小は一一㍍で六丁櫓）も積んでいて、海図・磁石・天測機などの新しい機器も備え、乗組員は六五名であった。

貞享四年の春（一六八七）、常陸（茨城県）の那珂湊（那珂町＝那珂川河口の港町）から出航し、六月松前に到着したが、蝦夷地の実情をあまり知られたくない松前藩は掟をたてに難色を示し、調査船としては許可されなかったので、一般の商船ということで石狩に向かうことができた。このときに光圀が松前矩広に盆栽の松・梅などを贈っている。

翌年の元禄元年六月（一六八八）再び松前に到着し、前年と同様に商船として石狩に行くことを許可され、北後志の沿岸のどこにも立ち寄らずに神威岬を乗り切って石狩に到着した。

到着すると通辞（通訳）から、附近に住むアイヌに「船を見に来るように」と伝えたが誰も来る者がいなかったので、さらに酒を準備して招いたところ、三日間に男女合わせて九五〇人ほどが訪れたと伝えられている。

六月から八月まで四〇日余りここに留まり、米一斗二升で鮭百尾と交換したといわれ、これが当時の標準的な相場と見られている。

滞在中に、シャクシャインとの戦いの後松前藩により蝦夷地で刀狩りが行なわれたことや、源義経の伝説などのことを聞き取りしている。

また一藩士は石狩川を遡り漂流しているとき、土着した和人一〇数人を発見したという。

快風丸は交易によって得た塩鮭一万尾と、その他干し鮭や熊の毛皮などを満載して八月に出帆したが、途中で台風に遭い、指揮官の徒目付役（かちめつけ＝警備や探索が役目）立花源太兵衛以下乗組員二七名を失い、辛うじて一二月に那珂湊に帰ることができた。水戸家が北地の開拓を志して、その発端で払った第一の大きな犠牲であった。

この蝦夷地（渡航し交易をしたという快挙の記録が、当時の学者であり政治家でもあった新井白石の著書『蝦夷志』の参考となり、その本によって蝦夷地への関心が大いに高まった。また、これによって西蝦夷地に関する調査などが相次いで行われた。

元禄元年（一六八八）の蝦夷地への渡航の記録は『快風丸渉海紀事』として資料が残されているが、前年の渡航についての詳細は不明

あの日！あの時

渡辺嘉之

『せたかむい』一月号の古平町史年表・昭和二九年（六月）に「東京大相撲横綱東富士一行が古平小学校校庭で興行」とありました。

その相撲にまつわる悲しくも、ほろ苦い思い出があります。

この年小学五年生になって間もない六月に、父が四三歳で亡くなったのです。まだ、死というものがはっきりと理解できぬままでの父との別れでした。

その頃はまだ大した娯楽もなく、子供達に人気のあるスポーツとして大相撲が結構支持されていたようで、場所中はいつもラジオの実況放送にかじりついておりました。そんなわけで凝り性だったせいか、主だった力士の本名・出身地・身長・体重等を諳んじる程熱中しておりました。

ところがこんなにも相撲が好きで、指折り数えて待っていた古平での興行の当日が、何という運命のいたずらでしょうか、父の告別式と重なってしまったのです。

当日は告別式の葬列が、自宅から火葬場まで親族や参列者が読経の声と共に歩いておりました。ちょうど今の文化会館のところで相撲が行なわれていましたので、葬列の中の小さな位牌持ちは、もう父の死の悲しみや長男という責任の重大さなどは、おそらく聞こえてくる会場のざわめきにかき消されてしまっていたのでしょう。

もう矢も楯もたまらなくなった少年は、父が茶毘にふされている間に会場に潜り込んでしまいました。時間はあっという間に過ぎて、骨拾いの段になっても肝心の息子の姿がなく、やっと探し当てて会場から連れ戻されるという、何ともはや人騒がせで親不孝な子供だったという始末記でした。

なおこの昭和二九年は、その大相撲で大ファンだった吉葉山が初場所で最初で最後の優勝をしたり、春にはもう二度と現れなくなってしまった鰊が群来たり、秋にはあの洞爺丸遭難の台風があったりで、父の死と共に忘れることのできない一年でした。

である。

光圀が没してから、快風丸は破損していたが修理されることもなく、その後は蝦夷地との目立った交通は自然と絶えたが、領内には蝦夷地を往来する者が相次ぎ、松前藩との交通は行なわれていたのである。

また、水戸藩三代目の藩主斉昭は光圀の志を継いで、北地開拓の建白書を幕府に提出したが、その内容はこれまでの国内の問題は長崎であったが、今の憂いは松前と北地にあると述べている。

いま北辺の地は諸外国がうかがっていて、一小藩に任せておくのは国家にとって重大な問題が起こることになる。将来のために手段を講ずるよう意見を述べ、そして自らこの難局に当ることを求めていた。

しかしこの建白書も、水戸家を邪推する者もいて、斉昭は国政を非難する者として謹慎を命じられてしまった。

蝦夷地の開拓に関する、光圀と斉昭の将来への雄大な計画は報いられなかったが、水戸藩内の一農家の出身で後世に名を残した間宮林蔵が現れ、優れた才能をもって北方の探検を行ない大きな成果を収めたのである。

※ 五百反帆＝布地の一反は大人一人前の和服地に相当する量です。布地の単位は複雑ですが、メートル法では小幅織物で幅三六㌢、長さ一〇～一〇・六㍍を一反としています。この量がそのまま帆の大きさに相当するかどうかは別として、当時としてはとてつもなく大きな帆であったろうと思われます。

戦中戦後

樺太漁場体験記

泣き笑いの

―周到に計画していた密航が首尾よく成功し、家族らを乗せた漁船は折りからの濃い霧の中を、ソ連軍の監視の目をかいくぐって無事北海道に脱出することができた。

しかし、ホッとしたのも束の間で、狡猾なソ連官憲による難題が待ち構えていた。

なんと言ってもこちらは敗戦国の身、厳重なソ連の監視下におかれ、しかも、不正の横行する中で生活を守っていくことは容易なことではなかった。

× × ×

この警備隊長の無責任な返答に激しい憤りを覚えたが、こんな三流の官憲なら去る者は追わずと心を鎮め、

「ではお元気で――」

と簡単に別れた。

間もなく新任の隊長が来たというので、早速出漁許可の話をしたが、

「私は何も知らない。もう少し待ってください」

と言うだけで、何度足を運んでもウヤムニャのままでさっぱり進展しない。やはりこの新任隊長も三流の人間らしいが、背後になにか不正な魔の影があると察し、それを探査した結果、ようやくそれが何であるかが分かってきた。

ソ連国営漁場には多くの日本人船頭が集められていたが、漁船が足りないために吉野の漁船に狙いをつけ、ひそかに沿岸警備隊と手を組み、機会を見て些細なことに因縁をつけて罪をなすりつけ、あわよくば私の漁船を押収する企みのあることをはっきり知りました。

国営漁場にいる日本人までがこれに荷担しているとは、いかに敗戦国とは言え一抹の寂しさを禁じることができませんでした。全く油断のできない状態なので、早速先手を打って、断固としてこれをはね返す手段に出ました。

家の船頭と機関長を呼んで綿密な計画をたて、先ず一時休業すると見せかけ、機関部の重要な部品を目立たぬ程度に取り外して、船を岸壁の造船所に上架しました。次のいい機会が必ず訪れることを念じながら、船にもしばらくの休養をさせることにしました。私もこれでしばらくは無法な重圧から逃れられると、解放された思いで少しは心が明るくなったのです。

翌日、私は沿岸警備隊へ行き隊長に、

「私の船は老朽化して、船体もエンジンこのままでは危険で、出漁も出来ない状態です。この機会にしばらく漁業を休業して、別な船とエンジンを整えるまで出漁はしません。北海道へ密航する心配もありません。岸壁に上架していますからご安心下さい」

と宣言して引き上げましたが、隊長は苦り切ったままでした。

翌日からは毎日が退屈なので、久し振りにのんびりとした気分で、今まで行ったことのない付近の山や川、農家など、町の周辺を改めて散歩して見ました。

ソ連人も沢山来ていて、いたるところで出会います。するとどちらからともなく笑顔で、

「ズラステー（今日は）」

と挨拶が交わされ、親密さも濃くなって来たことが感じられました。

ある日、小学校のグランドでソ連人がバレーボールを楽しんでいるのを見ていたら、年配の男性が寄って来て、

「日本人はスポーツを何もやらないのか？」

話しかけて来ました。私は、

「日本人はスポーツは何でも好きです。特に野球が大好きですが、グランドが使用できないのであきらめています」

札幌～余市

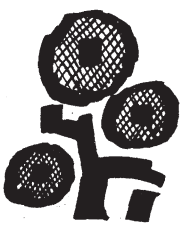
瀧内　優子

汽車の旅何年振りか弟の法事に行くに心はずみて
無人駅蘭島塩谷とアナウンス初めて聞くは二ケ国語なり
沿線に熊笹の映え続くなか虎杖の数多立枯し見ゆ
乗換への小樽のホーム０番は五番となりて我はとまどふ
大勢の子等を交じゐて溢れゐるＳＬに乗らむホーム賑々し
磯舟の二、三艘浮かぶ磯近く一幅の絵のごと車窓にて見ゆ
降りたちし雑踏の波我もまた地下鉄線へ急ぎて迎ふ
電車より出でし人、人また人よ朝のラッシュのこのエネルギー
エスカレータ馳け登る女長き足白い靴裏まなこにうつる
足早にホームを歩む数百のくつの中なる我の黒い靴

と答えたら、
「それは気の毒だ。バレーボールは屋内でもできるから、日本人はグランドで野球を楽しんで下さい。私が責任をもちます」
と、その人が親切に声をかけてくれた。その紳士はどんなエライ人なのか知らないが、私は厚くお礼を述べて別れた。
そしたら翌日から、グランドは野球のために解放されることになりましたが、あの紳士の姿はありませんでした。町内の野球関係者にこのことを伝えると皆躍り上がって喜び、早速新チームを作って練習を始めました。
私たちも旧漁業組合と旧加工組合を合併して、水産クラブと名付けた新チームを結成し、野村烝次郎さんが部長となり、久し振りにボールの感触を味わうことができました。
町もグランドも明るい雰囲気に包まれ元気が出たのも、あの一人の親切な紳士のお陰と感謝しました。
私たちの新チームの練習も一段落したところで、全町職域野球大会が開催されました。参加チームは小、中学校の合同チーム、役場、鉄道、商店街、王子製紙、水産クラブ等々でした。応援団と見物の大声援とヤジでグランドは大賑わい。好プレー珍プレーの続出に大歓声がわき、日頃のうっぷんを晴らすような楽しい一日でした。
ところが、まさかまさかで思いもしなかった私たちの水産チームが優勝し、野村さんを胴上げした光景は今も懐かしい思い出です。

～続く～

吉野さんは、昨年の冬に雪道で転倒して打撲を負い入院されましたが、短期間で回復しその後静養されて居りましたが、今月号からまた回顧談を執筆してくださいました。いつそうのご健康を願い、知られていない戦後の樺太での貴重な話題にご期待しております。



オールトピックス　二月号（昭和十四年）

―博徒奇談―

新講談　北海水滸伝　1

積丹の仙北殺し

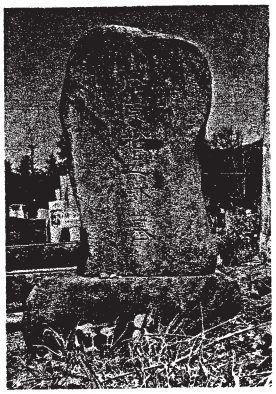
三水院酉五郎

古平町営墓地には明治の初めから千五百基余りの墓碑が建っていて、お盆にはお参りの人々で雑踏し大変な賑わいになります。

古里を去って墓碑だけが残されていて供養に訪れる人もおりますが、時代と共に訪れる人も絶えてしまう墓碑もあります。

その墓碑の一つに『佐原松五郎墓』があります。表には、明治廿有九年一月十四日　実名石井藤次郎、裏面には佐原カセ立之、外に三人の名前が連記され、卅年八月建立とあります。

いわれのありそうな墓碑だと思ってっておりましたが、実は古平の博徒の親分で、新講談として雑誌に掲載され仙北鶴松とも、兄弟分として深い関係がありました。かなり事実に基いた講談のようですので紙面で連載し紹介をします。



←佐原松五郎墓碑

忍路高島およびもないが
　せめて歌棄磯谷まで

昔も積丹半島は不便だったが、今でも交通に恵まれない点では積丹は北海道でも第一位にあるでしょう。鉄道はなく陸路は自動車が僅かに通じるだけ、海上の交通は小さな発動機船だけである。1漁業の盛んであった時分は、この不便な所ではあるが漁獲する産物が物を言って、沿岸の町や村は富裕でもあり、季節になると漁夫からこれを追って商売する女や博徒が流れ込んで、毎夜のドンチャン騒ぎです。

その積丹の余別村は戸数三百五十戸であったが、鰊建網の統数が五十を越え、これに小資本で出来る刺網を加えると、全村がことごとく漁業で生計を立てていたのです。

昔も汽船はあったのですが、余別などには寄港しません。この辺りの海運は大和船（百石か七、八十石積みで俗にバイ船と言ったもの）でした。

青森、岩手、秋田などから漁夫や米、味噌などの日用品を積んで来てこれを卸すと、天塩、北見方面まで行き、鰊漁が終わるとこのコースを逆に寄港し、漁夫といっしょに帰国する。

ところが積丹の神威岬に差しかかると、風模様によっては沖合いに吹き流されることがある。船頭はこれを大変怖れて、御神威（オカムイ）さんに神酒を供えて航海の安全を祈り、天候の回復するまで日和待ちといって来岸村から余別村の沿岸に避難したものでした。

それが一艘や二艘ではない。多い時には百五十艘からの船が避難したので、海岸にむしろ小屋を建てて十五日から一ケ月ぐらいの日和待ちをする。積んだ荷物の鰊を金に替えて茶屋遊びをする。それに飽きると今度は博奕（ばくち）が始まる。函館辺りの博奕打ちから、近いところでは古平、美国辺りから、この船頭達の金を巻き上げようと余別村に集中します。

その当時、来岸村には高橋重次郎という顔役がいて多数の子分がおり、なかなかの勢力があった。他地方から入り込む博徒は、一度は必ず高橋のところに挨拶したものであるが、この重次郎が病死した後（吉田栄七という顔役が、種田幸次郎外数人の子分を連れ余別村に落ちついた。積丹郡一円はたちまち栄七の縄張りになった。明治二十四、五年のことであったでしょう。ここを根拠にして縄張りの拡張に熱中した。

栄七は五十五歳のとき、この社会の交際がうるさくなって縄張り全部を子分の幸次郎に譲って、自分は

隠居して興業関係に手を出して悠々自適の生活をおくりました。種田幸次郎は片目の幸次郎といって、積丹の仙北殺しの主人公であります。

博奕打ちの持っている金に正当なものなど無いでしょう。勤労から生じたものなどは無いから、悪い金でないまでも俗に言うアブク銭だ。ですから博徒は金を金と思わず片っ端から使ってしまう、切れ放れのいいのがこの社会の常なのですが、幸次郎という男はケチなこと無類で、それで盃をした子分までが幸次郎を良く言わないほどだから村内の評判はいたって悪い。

そこへ小樽の顔役で丸モの森田常吉と共に北海道に渡った北沢金蔵の身内、仙北鶴松が積丹へ乗り込んで来た。仙北は暴れ者だったが金の切れ方が良かったので幸次郎のような不評判ではなく、料理屋に上がっても七円の勘定に十円札を出すというふうで、

「仙北の親分は肝（はら）の中がきれいだ」

と日増しに人気を高めた。

幸次郎とも兄弟分の盃をして後日縄張り上の喧嘩を避けることにはなっていたが、両雄並び立たずで、幸次郎の方では仙北を何とかしなければ縄張りを荒らされてしまうと深く心を痛めていた。

ある時、仙北が女房のキクを連れて余別に来たが、本来ならば兄弟分の幸次郎の家に夫婦で泊まるのを、余別橋のたもとにある旅屋にキクを泊めておいて仙北一人で幸次郎方を訪ねた。

このキクという女は秋田生まれの美人だったが、徹底した悪趣味ぶりは横櫛お富と言われた悪女にそっくりで、子分を呼び捨てにしたりして嫌がられていて、右の頬には刀傷がありただのネズミではなかった。

一方、幸次郎の女房は亭主が片目で醜男（ぶおとこ）だったのとは反対に、今小町とうたわれるような美人だった。

仙北が一人幸次郎の家に入って行くと、

「オイ兄弟、お前は姐ご（あねご）をどこへ置いた来た」

「あれか、橋のたもとの宿屋に置いて来た」

幸次郎の片目は仙北を睨みつけている。幸次郎はどこかで一杯やろうと仙北を連れ出し、曲定（かねさだ）という料理屋に行った。

幸次郎は仙北に対して燃えるような反感を持って飲んでいて変な気配もあったが、仙北は幸次郎をのんでかかっているので野郎に何が出来るものかとばかり、お互いにまずい酒を呑み合って二人は幸次郎の家に帰って来た。

茶の間に二人が坐った時はどっちも酔っていなかったようだが仙北は、

「姐さん、すまんが水を一杯くれい」

と水を飲んでそのコップを横に置いて対座していたが、幸次郎はもともと酒ぐせの悪い男であったが、それに今夜は仙北に対して気が高ぶっている。

「お前は俺のところに来るのに嬶（かかあ）を連れて来れないとは水臭いと思わねえのか。いったいお前のすることは気に入らねえ、俺をなめていやがる」

それからは嫌味たらたらと仙北のやることに文句をつけたので、女房や子分たちははらはらしていると、仙北も酔ってはいるしムシの居所が悪かったのか、コップを持つといきなり幸次郎の眉間に叩きつけたので眉間が割れて血がだらだらと流れた。幸次郎はカッとなって仙北を仰向けに突き倒し、ここで両人が上になり下になりの格闘を続けたが幸次郎の子分が引き分けると、仙北ははだしのまま外に飛び出し宿屋に向けて駈けて行く。

このままでは大変なことになると見て、能登屋良吉という男が次の間で寝ていたが起きて仙北の後を追い、宿屋についた時には仙北は別の道を引き返しすでに宿屋には居なかったので、幸次郎の家に戻って来て見ると近所は黒山の人だかりで、仙北と幸次郎の白刃の一騎打ちを遠巻で見物していた。

七月下旬の月はくまなく照って風ひとつない静けさである。ただ波の音が低く渚にあってもの悲しさを覚える。

〈次号に続く〉

老兵の綴り方

あゝ樺太国境守備隊

橘　義春［遺稿］

靖国の英霊に捧ぐ
鎮魂のラッパ

シベリアおろしと呼ばれる寒風は、マイナス三十度という気温の中で荒涼としたツンドラ地帯を寒気の塊となって、縫い針で肌を突き刺すようにまともにぶつかってくる。樺太の国境はこんなところである。

私の所属していた樺太国境守備隊は国境線に近い『気屯』という小さな町に駐屯していた。運命の昭和二十年八月九日、突如、ソ連軍が国境を突破して進攻して来たとき、私はラッパ手として第一大隊本部の指揮班へ配属されていた。雲霞の如く攻め寄せるソ連軍と、国境の町古屯で死闘を繰り返し、一個大隊全滅という悲運にさらされた。

あれから四十七年、今でも時折その頃の夢を見る。地獄の底から吹き上げて来るような、骨の髄まで凍らせる風の哭き声を聞く。それは亡き戦友達の地の底から聞こえる慟哭であり、血涙の絶叫となって私の体の中まで入り込んで悪寒を誘う。激戦に継ぐ激戦、我が物顔に走り回る敵の戦車群、空からの機銃掃射、地上からは山砲、戦車砲、迫撃砲、機関銃、自動小銃の乱射、眼前にさく裂する手りゅう弾、果敢なる白兵戦、ツンドラの中へのめり込んでいく戦友、敵弾に顔をえぐられ血を吹きながらも闘志を燃やす下士官。

「天皇陛下バンザイ！」

と叫んで倒れる初年兵。

「仇は必ずとってやる」

と叫ぶ上官。

「お母さん」

と、最後のたった一言で息絶えた若い将校。この繰り広げられる血なまぐさい光景の一つ一つが、まるでスロービデオのように克明に夢の中で再現され、私はきまって汗びっしょりになりながらラッパを吹き続けた。

大隊長小林貞治少佐以下ほとんどの兵が玉砕した中で、奇跡的に生き延びた私は、復員後靖国神社へ行き亡き戦友達に詫びた。屍を埋葬することも出来ずに、ツンドラの草原に置き去りにしたことに心が痛むからだ。雲霞のごとく進撃して来るソ連軍に力の差をまざまざと見せつけられ、屈服してしまった自分が情けない。

あの樺太の国境のタコつぼ陣地の中で、迫り来る死を覚悟したときの気持ちは意外と冷静だった。そんな中でいくら消そうとしても浮かんでくるのは、私をわが子のように育んでくれた祖母の柔和な顔だった。二度と生きて逢えないはずだったが・・・。

運命とはいいながら、片や荒涼とした異郷のツンドラの凍土の下に、誰一人訪れることもなく寂しく眠り、一方は平和というぬるま湯にどっぷりとつかり、やさしい家族達に囲まれ、こうして繁栄の日本に生き永らえている。同じ戦場で共に銃をとり、祖国のために命をかけて戦い散華していった兵達とこんな差があっていいものだろうか・・・。

今は亡き戦友をしのび、友よ許せ、安らかに眠れ、いつかきっと樺太の国境へ貴様の骨を拾いに行くからな。若くして死んだ貴様の分まで俺は生きるからな、どうか見守ってくれ。とそんな思いをこめて靖国神社の社前で、異国の戦場で散華した友よ安らかにと、陸軍の最後のラッパ手として今日も鎮魂のラッパを吹く。

～最終回へ続く～

短歌

古平町岬短歌会

日光の名所に残る杉並木ながき歴史を今に伝へて　池田テル

久々に姉妹そろひて湯の宿に幸せかみしめ古稀となりしも　金子寿子

寒き朝外（と）に出でて見る山頂は朝日眩しく雪原照らす　坂本信子

海岸の近くより立つ虹の中ごめ乱れとぶ夕日浴びつつ　鈴木時子

年重ね時の速さを思ふ今ふとよぎりゆく故郷の事　田中香苗

碧き潮まぶしき真昼船帰る海の男の頬もひかりて　丹後初江

バス降りて杖をたよりの帰り道初の時雨にぬれて歩みぬ　東美知

えび籠積む切揚船の航海灯波静かなる海を照らしぬ　堀典子

俳句

古平俳句会

眼開けがつぶりと網噛む真鱈　越野清治

着ぶくれも心の張りを失はず　斉藤波留

沸々とたぎる鉄釜番屋の炉　山口悦子

遠吠えの奇岩に飛沫冬の波　越野敏雄

冬晴や補修工事の捗りぬ　大和田絵伊

静寂や山あひの星雪に明け　高橋重子

水澄めり風音澄めり秋日和　外山俊久

冬雲の疎密のありて疎の明り　堀典子

黒鮪並ぶ糶場の顔と声　本間寿昭

冬波の立ちし高さに雲迫る　渡辺嘉之

冬の波ひたすら岬を打ち返す　室谷弘子

百選の屏風岩の冬ざるる　仲谷比呂古

古平町史年表

昭和29年（1954）　～続き

★古平町開基８５周年記念式典が行われ、祝賀の旗行列や仮装行列が町内をまわり、自衛隊音楽隊の街頭行進も行われる

▲沖村港が第１種漁港に指定される

★水見句文が古平小学校正門横（現在の文化会館敷地）に、高野素十句碑を建立する

▲吉田一穂作詩『古平小唄』を、作曲者八州秀章が古平小学校で歌唱指導をする

▲ＮＨＫ全国盆踊り大会に、古平盆踊りが全道代表となる

▲天皇・皇后両陛下の奉迎に、伊藤町長ほかが余市町まで出向く

▲ＨＢＣ放送が「録音風物詩」で古平町を紹介する

▲戦没者遺児代表２名が靖国神社参拝に出発する

▲祝聖会により観音滝霊場の参拝が行われ１３０名余りが参拝に訪れる

★新生婦人会が７５歳以上の老人を招待し、禅源寺で敬老会を行い１５０人程が出席する

▲台風２９号被害により、古平町災害対策本部を設置する

▲台風下、岩内で３０００戸余りを焼失する大火があり、青函連絡船洞爺丸が沈没する大惨事となる

▲古平町に災害救助法が適用される

▲台風により電話線が切断され、数日間不通となる

★耐火構造２階建て公営住宅３棟１２個が完成する

▲㈱福岡商会が稲倉石附近に古平鉱山を開鉱する

★古平小学校新地分校が新築落成し、落成式が行われる

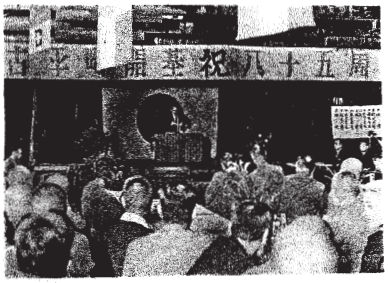
▲古平漁業協同組合の全額負担によって、木造漁業埠頭が完成する

▲古平水産加工協同組合の魚粕乾燥工場が完成する

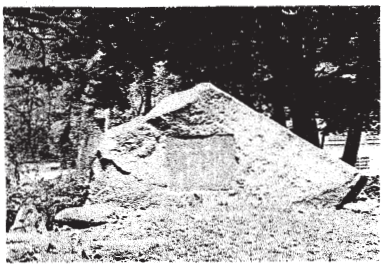
▲雪印乳業余市牛乳処理工場が完成し、古平町からも牛乳を出荷する

▲豪雨災害に国立小樽診療所が無料診療に当る

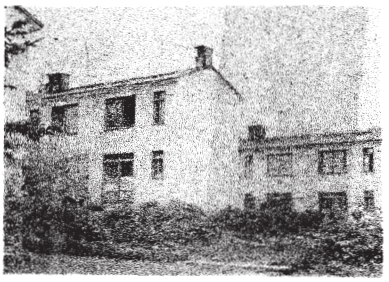
▲稲倉石婦人会が結成され、会長に逢見登代子が選出される

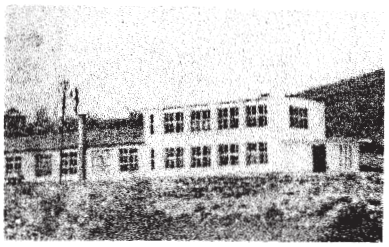


→古平町開基八十五周年記念式典


→高野素十句碑

禅源寺本堂前の記念撮影


→二階建て公営住宅


→新地分校落成